

2017年12月

## 日本におけるキャリア教育・職業教育について ～フィンランドの教育制度と比較して～

経営学部 経営学科 新井ゼミ  
B4R11084 佐藤直史

### 【卒業論文概要】

平成16年に文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」において文部科学省予算として「新キャリア教育プラン推進事業費」が計上され、キャリア教育がスタートした。キャリア教育・職業教育といった教育活動が学校教育に求められるようになった背景には、新卒無業者の増加や早期の離職率が上昇していることが挙げられる。以前は、新卒一括採用制度により学校から職場への移行がスムーズに行われ、敷かれたレールの上に乗っかることさえ出来れば、安泰であるという価値観が広がっていた。しかし、新卒一括採用制度が崩壊したことにより、アルバイトなどの非正規雇用で働く労働者が増加している。若者の働くことに対する意欲、コミュニケーション能力、対人関係能力の低下が指摘されている。雇用形態の多様化・流動化により、世の中を取り巻く労働環境は大きく変化している。

キャリア教育・職業教育の普及が求められているが、学校教育の現場では積極的に受け入れられ、普及が進んでいるとは必ずしも言えない。本論文の目的は、我が国のキャリア教育・職業教育の普及を推進するうえで必要になる要素について提言する。独自のキャリア教育・職業教育を展開しているフィンランドの教育制度を用い比較検討を行う。

我が国のキャリア教育・職業教育の現状としては、「将来の自己実現」という解釈がなされており、限定された範囲での方針を改善する必要があると考える。そこで日本の教育には江戸時代の「寺子屋」式教育が必要であると仮説を立案した。その根拠として、日本とフィンランドでは教育に対する価値観が大きく異なっていることをトリアンディスの「個人主義」「集団主義」の理論を用いて分析・検討した。両国の教育制度の比較し、フィンランドでは早期の段階で明確な進路決定が必要とされることを軸に我が国との差異を分析・検討した。以上の2点から仮説の実証を図り、考察した。そのうえで、キャリア教育・職業教育が目指す人材育成の方法として、江戸時代の「寺子屋」式の学習の重要性を検討した。「寺子屋」では社会で生きていくための実践的な職業教育として「型をまねる」人格的教育に重きが置かれており、理論と実践の双方が実現可能であったことが判明した。現代においては社会の変化と共に、こうした思想が排除されつつあるように考えられる。

キャリア教育・職業教育における今後の課題として「寺子屋」式の教育の必要性が再度議論され、「型をまねる」人格的教育の推進することこそが、これから取り組むべきキャリア教育・職業教育における課題として提示した。